

「モラ」手法によるテキスタイルの創作

—ゆかたと帯の製作—

松本 幸子

「モラ」とは、亜熱帯地域のパナマ諸島に住むクーナ族のインディオの女性が着用している民族衣裳に付いている「飾り布」のことを言う。異国の服飾工芸的手法である「モラ」について、その技法と模様の意味を調べ、日本の民族衣装である長着と帯のテキスタイルとしての「モラ」を創作した。最終的に完成した作品から、「モラ」は布を重ねて作る技法であるために厚みが増し、機能性は、帯に適したテキスタイルとして活用できると考えられた。次にきもののテキスタイルとしては、「モラ」部分の材料にオーガージーを、身体に触れる部分には木綿を使用して、見た目と身体的にも涼感のある作品に仕上げた。

キーワード：テキスタイル、服飾工芸手法、民族衣装、アップリケ、クーナ族、モラ

1. はじめに

パナマ諸島のサン・ブラス諸島のクーナ族の女性が着用しているブラウスの前と背についている飾り布「モラ」手法を利用して、和服のテキスタイルを作り、日本文化と異文化を融合させた創作作品を製作することを試みた。

「モラ」の発達の経緯については次のような説明がなされている。十九世紀ごろ、他民族やマラリアなどの害虫を逃れてコロンビアからカリブ海沿岸のサン・ブラス諸島に移住したクーナ族であるが、その頃までは、ほとんど裸で暮らしていた。男性は腰に紐をまわし小布を下げ、女性は腰布一枚だけを着用していた。身体は、顎から口唇まで入れ墨をし、男女とも身体に明るい赤、黄、青で色彩をしていた^{1,2)}。上半身、腕、股にジグザク文様や半円、三角形などを描いていた。やがて宣教師の影響か、十九世紀終わりごろには、ゆったりとした大きさの貫頭衣を着用し始めた。この服を着ることにより独特な服飾工芸手法が創り出されるきっかけとなり²⁾、また、クーナ族の身体的特徴を見てみると、男性は背が低く、胴長でカヌーでの移動のため足が小さく、上半身の発達が著しい。一方女性は熱帯地域の民族に見られるセ

クシーさは見られず、やせた貧弱な体型をしている。これらの身体的特徴をカバーし、装飾的な色鮮やかな、女性の民族衣裳「モラ」が生まれる原因になったと考えられる³⁾。

この「モラ」は、鮮やかな赤、黄、オレンジ、緑などの布を重ね、上の布から切り込みを入れると黄色があらわれ、それらの布の縁をひと針ひと針丁寧にかがり、次に黄色の一部を切り込むとオレンジ色と、下から次々に色がわきでるような仕掛けである。いわゆる逆アップリケの形である。初期の段階では、この飾り布に頭と腕が通るような開口部をつけた貫頭衣を「モラ」と呼んでいる。現代では、それにえりあきと袖がつくブラウス形に変化している。初めのころの模様は、それまで体に描いていたジグザクや三角文様の繰り返しを写した模様が使われていた。やがて身のまわりや伝説上の動・植物に変化した。その後、外界との接触が頻繁になり、ポスター、雑誌、観光客からの情報と刺激から生み出された模様もモチーフに取り入れられるようになり、細かい情景を図案化した行事なども見られるようになった。そしてこの土地独特な新しい色鮮やかな民族衣装が創りだされたのである^{1,2,3)}。

このように日本とまったく違う気候地域で生まれた工芸手法を、日本の伝統的な民族衣装のテキ

スタイルとして取り入れ、二つの国の民族衣装の融合した作品を製作することを試みた。

2. 方法

「モラ」とは、逆アップリケとも言う独特な技術を施した民族衣装に短い袖の付いたブラウスの形で、極彩色の布を何枚も重ねてつくるのが特徴である。使用する木綿の布は一辺が30cm前後の長方形で、一般的には赤または、黒の布をいちばん上におき、緑、黄、赤、オレンジ、ピンク、紺などの3～4枚の布を重ねて行すが、模様の部分だけに重ねることもある。手順としては、重ねた布の周囲を縫糸で縫いとめておく。表の布に模様の輪郭に沿って小鋏で切り込みをいれ、針の先でわずかの布を内側に折りながら一針一針ていねいにまつっていく。また次の布に切り込みを入れて繰り返すことにより、段々に色鮮やかな色彩が表れ、模様が表現されていく。またカットした小布を上に乗せて、かがるアップリケもある。またカッ

トしたところに部分的に布を入れ込み、違う色を加えることもできる。このように各史料より、いろいろな方法があることがわかった^{4,5)}。この中より基本的な二つの「モラ」手法があることが分かる。まず一つ目の方法は、アップリケと逆に布を重ねて、上から順に、形に添って、切り抜いて下の布の色をだして、その布にたてまつりで、まつっていく方法で、これを繰り返していくものである。しかし細かい模様などの表現には、下から布を重ね、カットして上にとまつっていく方法の方が作りやすく、きれいにできることが史料からわかることである^{4,5)}。また実際に試した経験からも言えることである。図2は「モラ」の断面図例である中央部分がアップリケの要領でパーツの周りを折りながらまつり、中央部分にはカットして間にカットした大きさより大ききな小布を入れ込む、はめ込み布を入れる方法である。両方は布を上重ねていく方法で、下から出来上がっていく方法である。

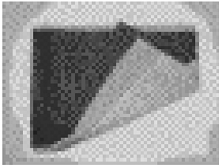
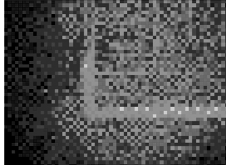
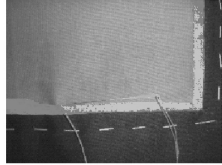
		
何枚かの布を重ねて図案をトレースする。	トレース線より0.3-0.5cmのこして、カットし内側に折り、たてまつりにする。	さらに内側へと同じ事を繰り返す。

図 1-1 基本的な方法 (A)

		
台布と2枚の布を重ね、図案をトレースする。	仕上がり線より0.3-0.5cmカットし内側に折り、たてまつりをする。	さらに布を重ね、出来あがった部分より0.3cmぐらい下の布が見えるように内側に折り、たてまつりをする。これらを繰り返して行く。

図 1-2 基本的な方法 (B)

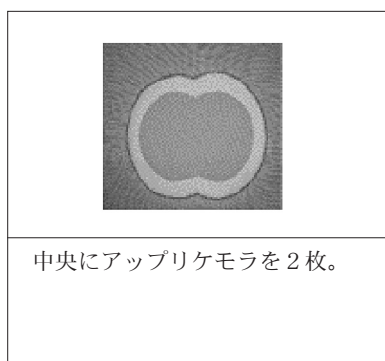


図 1-3 基本的な方法 (C)

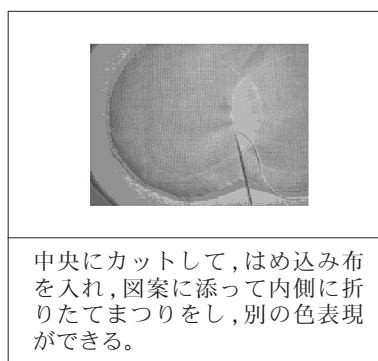


図 1-4 基本的な方法 (D)



図 2 「モラ」の断面図

これらの方法を用いて、最初に夏に着用する一枚仕立てのきものと半幅帯を想定したテキスタイルを考え作品を製作することにした。まず既製の半幅帯の厚さを計測比較することとした。さらに夏に着用するきものは、蒸し暑い日本の夏の気候に合わせて、涼しさの表現方法を重視し、素材をオーガジーの透け感を利用することにした。そして、和服の特徴である直線的なパーツの切り替えを踏まえて、斜めの切り替えを加えることも考え、刺繍ミシンを利用して、布と布の境目ラインも装飾的効果になるように工夫を加えてみることにした。

3. 結果と考察

図 3 は既製の半幅帯と今回製作した半幅帯の厚さを比較して、示したものである。既製の帯としては、単仕立て 3 種、袷仕立て 7 種の計 10 種類の帯について計測し、各帯について 5ヶ所の計測を行い、平均値を求めた。この結果から既製の単・袷の帯の厚さ平均は 1.24 mm で今回製作した帯の厚さ平均は、1.49 mm である。既製帯との厚さの差は、0.25 mm 程度のわずかな増加が認められるが、実際に帯を縮めて見ても、支障は感じられなかった。このことから、既製の帯と変わりなく特に厚くなることもなく、縮めやすい仕上がりになり、帯としての性能を備えているものが完成した。

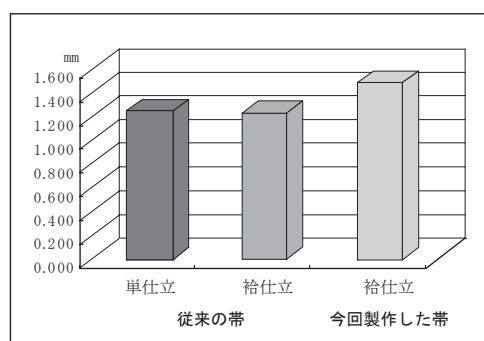


図 3 従来の半幅帯と今回製作した「モラ」帯の厚さ比較

次に和服に「モラ」を取り入れたことについて模様と色彩から、検討する。まず、模様について「モラ」は、伝統的なモチーフが非常に多い。例えば民族の存続をかけた戦いの象徴である小さな鷹、国土の霊、精霊、神が空にかけた旗といわれる虹、この世が大洪水に襲われた時に亀が動物や人間を背中に乗せて非難したという伝説や、鳥、魚、迷路は人生であり、天国への道でもあるとされている。また、神のお告げを伝える猿や太陽、月、祈禱師、ヤシの木、海、そして毎日の生活の出来事まで、様々である。

以上のように、「モラ」は個々のモチーフがそれぞれに何らかの意味を持っていることが大きな特徴といえる。そこで、今回は夏に着用するゆかたを想定した模様をデザインした。

わが大学の校章も KVA と三つの文字を合わせたマークになっており、K は、Knowledge : 知識を深める、V は、Virtue : 特性を養う、A は、

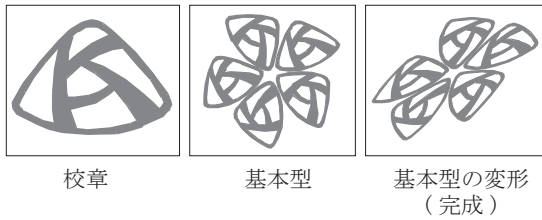


図4 今回デザインしたモチーフ

Art: 技術を磨くという意味を持つ。この、シンボルマーク KVA の校章をもとに、花をアレンジしてみることにした。幾つかのマークを花の形にし、またそれらを校章の寄せ集めにならないように考え、ゆがみを加えデザインを完成させた。これらのデザイン操作は、パソコン上でイラストレーターのソフトを使用して行った。

次に完成したデザインモチーフをきものの中に配置してみることにした。日本伝統の模様配置には、総模様（振袖）、江戸褙模様（留袖）、肩裾模様（訪問着）、付け下げ模様、熨斗目模様、一文字模様、割り付け模様、絵羽模様などの模様があり、配置にも決まりがある。その中でゆかたは、総模様や割り付け模様の類に入ると考えられる。しかし、現在、ゆかたは、若い人の中で夏に定着した流行になりつつあり、安価に手に入りやすくなっていることから、夏のサンドレス風に着用者が増えており、かなり自由度が高くなっていると考えられる。これらの理由から、今回は、伝統的な模様配置から少し離れることにした。また、涼しさの表現を重視するために、素材をオーガンジーの透け感のある布を使用したことにより、従来のきものの模様配置とは違った位置に配置する必然性も生じ、図5に示したようなデザインを設定した。

作品を製作するにあたり、まずゆかた作品は、

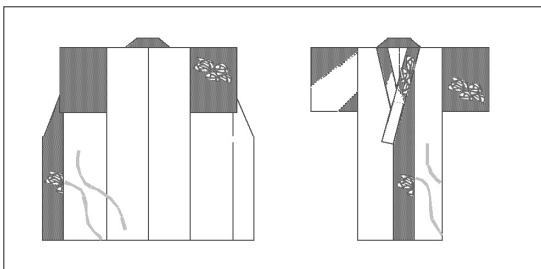


図5 ゆかた模様配置図

材料に平織染めの木綿反物とポリエステル100%のオーガンジーを使用し、オーガンジーの部分に「モラ」手法を用い、前にデザイン化した KVA 校章の花模様を配した。また二つの素材をバランスよく、直線的な和服独特なパーツごとに配置を決めた。さらに一部にはこの直線的な特長を活かし、右前袖に斜めの異素材の切り替えを加え、切り替えラインは、刺繍ミシンの縁かがり縫いを利用し、装飾的になるように工夫を加えた。



B方法



上前衿 B方法
前身頃 C方法



図6 ゆかた作品とその拡大図

次に半幅帯の最初の作品(1)は、「モラ」独特のモチーフ鳥と色彩感覚を参考に図柄のデザインと色鮮やかな色合いで色彩を決め、帯の前の部分と後の部分は文庫結びにした場合を考慮して、模様を配した。また「モラ」の方法は、上の布を下にくり抜いて行く方法図1-1 基本的な方法(A)と、その一部分に、はめ込み布を入れ込んでいく方法図1-4 基本的な方法(D)と、最後に形を切

り取り，上からアップリケをする方法図1-3 基本的な方法 (C) を組み合わせて，作品を製作した。

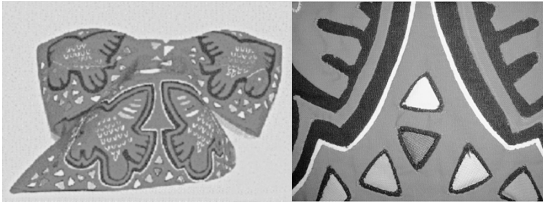


図7 半幅帯 (1) とその拡大図

次に作品 (2) は，イギリスの神話童話の世界よりヒントをつかみ，独自の繰り返し模様を作り出し，色合いも少し抑えた色合いを考えた。繰り返し模様は，クーナ族では伝統的に魔よけの意味もあるようである。手法は，布を重ねてカットをし，たてまつりをし，さらに布を重ねて前のラインより大きく布をカットして，たてまつりをし，下の布の色を見えるようにする，前半で説明した二つ目の方法図1-2 基本的な方法 (B) である。模様の配置は，前の二回目には巻く表に出てくる部分から後の結びをする最後のたれまで模様を入れた。



図8 半幅帯 (2) とその拡大図

4. おわりに

日本とパナマの服飾工芸的手法「モラ」を使用したテキスタイルを創作し，この異国のテキスタイルを使用して日本民族衣装であるゆかたの半幅帯と女物ゆかたを製作した。この結果，布を重

ねることと，極彩色の鮮やかさは，半幅帯には適したテキスタイルとして活用できることが分かった。また，ゆかたについては，今回は涼しさを強調し薄地の布であるオーガンジーを使用した結果，涼感が感じられる作品となったが，オーガンジーは思ったより張り感がでることが分かった。しかし今回のゆかたは身体に接する部分は木綿の素材が多く，着心地が損なわれずに最初の目的でもある涼しさの強調は得られた。

引用文献

- 1) 梅棹忠夫：世界旅行－民族の暮らし1－着る・飾る－民族衣装と装身具のすべて－. pp. 22-23 (日本交通公社出版事業局，東京，1982)
- 2) 朝日新聞社：世界の衣裳 シリーズ「衣の文化」①. pp. 59-60 (朝日新聞社，東京，1986)
- 3) 檜枝茂信：モラ・サンブラスの芸術 (求龍堂，東京，1973)
- 4) 中山富美子：モラ手芸 (日本放送出版協会，東京，2001)
- 5) 中山富美子：オリエンタルな刺しゅう (日本放送出版協会，東京，1999)

参考文献

- 1) 松本幸子：「モラ」手法を用いた帯の製作 (服飾文化学会第5回大会研究発表要旨集，2004)
- 2) 松本幸子：「モラ」手法を用いたゆかた製作 (服飾文化学会第6回大会研究発表要旨集，2005)
- 3) 熊田知恵，森田萬里子，古松弥生，永井房子：和服－平面構成の基礎と実際－ (衣生活研究会，東京，1987)
- 4) 世界の衣裳 シリーズ「衣の文化」① (朝日新聞社編，東京，1986)
- 5) パナマの民族手芸モラ (MOLA) ホームページ
http://www.hat.hi-ho.ne.jp/heart_thoughts/panama/mola.html (2004/02/24)

(2007.3.30 受付 2007.5.28 受理)